



薩英戦争秘話

< 2 >

鹿児島市維新ふるさと館

特別顧問 福田 賢治

【プロフィール】

昭和17年鹿児島市生まれ。
平成14年3月清水中学校校長を最後に定年退職。
同年4月維新ふるさと館歴史解説員、19年6月同館館長を
経て24年6月から特別顧問。

捕虜となった五代友厚と松木弘安

「生麦事件」に端を発する薩英戦争の際、イギリス艦隊の捕虜となり、敵艦上で薩英戦争を体験した薩摩藩士がいた。後に大阪株式取引所や大阪商法会議所初代会頭となり、大阪造幣局や大阪市立大学の創設など、大阪を大商業都市として発展させる礎をつくった五代友厚と、外務省創設に寄与し外務卿となった松木弘安(寺島宗則)である。

拿捕された薩摩の蒸気船

薩摩藩は、生麦事件の犯人処刑や賠償金を要求して鹿児島に来航した英国艦隊に対し、まともに交渉に応じなかった。英国艦隊は、薩摩藩が三隻の蒸気船を重富脇元浦に隠していることを知り、拿捕する策に出た。この蒸気船一隻の値段は、英国が要求する

賠償金2万5千ポンド(10万ドル)に相当する高価なもので、英米から購入したばかりであった。船奉行添役で船長の五代と松木は「未だ宣戦の布告なきに、何を以て我が船を掠奪せんとするや(薩藩海軍史)と抗議したが、英国は「従わねば、乗員もろとも撃沈すること迫ったため、やむなく要求に応じた。乗組員の一部が抵抗した天佑丸の乗組員は、全員脇本浦で下船させられたが、五代らは拒否。三隻とも英国軍艦に引かれ、桜島の小池沖に停泊した。他の二隻の乗組員は全員桜島に上陸させられたが、頑強に上陸を拒否した二人は、旗艦ユーリアス号に移され捕虜となった。

英国代理公使ニールは、二人に対し薩摩の船長として敬意を表し、一等士官の船室を与え、「戦闘が始まっても

甲板に自由に上がり、戦況を見てもよい」と伝えた。蒸気船拿捕の知らせに薩摩はついに砲撃を開始。戦闘が始まると同時に拿捕された三隻は焼かれた。

一時身を隠していた二人

こうして二人は、はからずも敵艦上で、味方が放った砲弾をあびつつ戦争を体験することとなった。また、艦隊の上陸作戦について問われた二人は、多くの勇敢無比の薩摩武士には到底勝てないと進言し、その上陸作戦を断念させた。

艦隊は翌日まで交戦し横浜へと帰還した。二人は横浜で幕府や藩に引き渡されることを強く拒んだ。当時捕虜となった者は、自決することが本分とされ、生き延びたとしても、藩の秘密を洩らした者として脱藩者と同様、切腹か斬首が常であった。二人は

藩邸に戻ることも出来ず、身を隠さねばならない状況に置かれたのである。

事実、「二人は藩の秘密を洩らして解放してもらったのだ」と流布されていた。また、五代が、戦争を回避するため長崎のイギリス商人グラバーに対し、和睦の仲介を依頼していたことも誤解される要因となっていた。英国艦隊の通訳をしていた清水卯三郎は二人に同情し、卯三郎の親戚にあたる熊谷の豪族吉田六左衛門を紹介し、かまってもらった。

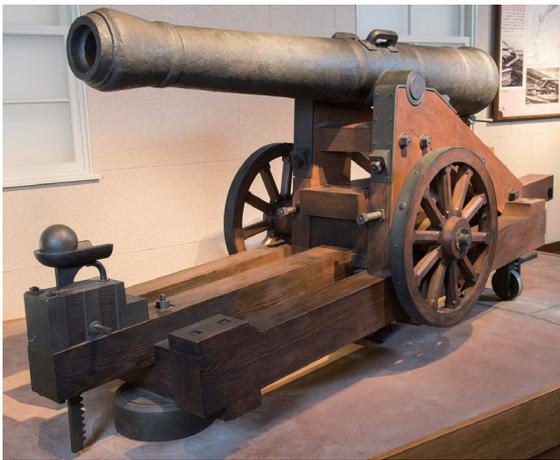
世界の大勢を説き、藩へ意見

その年の11月、薩摩とイギリスは講和を結び、藩も落ち着きを取り戻したことを知った五代は、翌年の元治元年(1864年)1月、松木らの反対を押し切り、川路要蔵の変名で長崎の酒井三蔵の家に身を寄せたのである。やがて、これは薩摩藩士らの知る



ところとなり、小姓役の川村純義かわむらすみよしが従者4人とともに五代を訪問。五代は刀を持たず丸腰で応対し、今までのいきさつを説明すると同時に、世界の大勢を説き、欧米先進国への留学生派遣や蒸気機関の購入など、藩の施設充実に関する10カ条の意見書を示した。

川村らはこれに感動し「君公きみこうにその意見と忠誠を伝え、今後は憚ることなく市中を闊歩かつぽしてよい」と五代に伝えた。その後、他の藩士からも訪れ、藩の重臣たちに五代の気持ちも伝えられた。4月に冤罪えんざいも晴れた。松木も状況を知らされ、二人は藩に復帰できたのであった。こうした苦難の体験と藩への思いが、後に二人が国政の上で大活躍する精神的支えとなったのである。

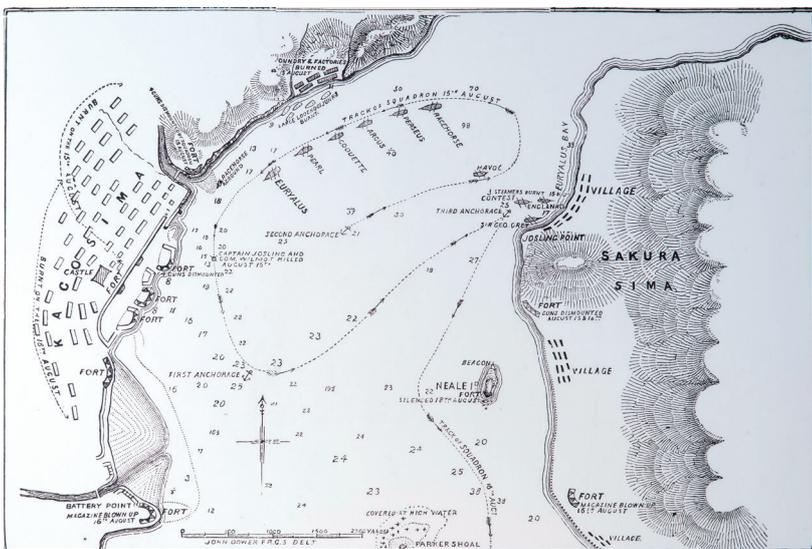


薩摩軍の「80ポンドカノン砲」1/2模型

砲身は4m、80ポンド(約36kg)の砲弾を飛ばした
[鹿児島市維新ふるさと館 模型展示]



錦江湾から望む市街地



英国艦隊の動きを記した海図(1863年)"ロンドンニュース"(右側が桜島)

[鹿児島市維新ふるさと館 パネル展示]



大阪証券取引所前の五代友厚銅像